

博士學位論文要約

論文題目：ブルクハルト—教育としての歴史

氏名：森田 猛

要約：

19世紀スイスの歴史家ブルクハルトの知的業績・文化史学を、「教育としての歴史」という観点から、その理念と方法を分析し、同時代の社会との関係において、その歴史的意味を考察した。従来の史学思想的研究が、歴史学の研究的側面（「研究としての歴史」）を注視し、その史学内的な意味を問題にしてきたのに対し、歴史学の教育的側面を通して、その社会的脈絡、歴史学の史学外的状況との連関に眼を向けることによって、歴史学の歴史をいっそう広範な影響関係からとらえようとしているところに特徴をもつ。その意味で、本研究は、ブルクハルト史学の教育的性格を指摘したリューゼン(Jörn Rüsen) (1972年) やムーラック(Ulrich Muhlack) (1990年) の研究をいっそう進めるものであり、方法論的には、科学史の一領域にとどまる狭義の史学史を脱却し、一般史的な志向をもとうとした「新しい史学史」(イッガース(Georg. G. Iggers))に通じる部分があるといえよう。

ブルクハルトの生涯を一瞥すると、バーゼル大学正教授に就任後、著述活動を犠牲にして、同大学における教育活動に専心したという、近代の歴史家としては特異な経歴につきあたる。「研究としての歴史」の視点に立ち、歴史家＝歴史研究者とみなす旧来の史学史研究は、この伝記事項を軽視し、生前に公刊された著書と没後に編集刊行された講義草稿を同一視することによって、誤解の上に彼の人物と仕事を評価してきたといえる。本研究は、ブルクハルトがもっとも重視した活動を研究視座の中心におき、「オリジナルな位置」において彼を評価しようとするものである。2000年にはじまった批判版新全集は、これまで未刊であった講義草稿、講演原稿を多数ふくむものであり、この研究方向に多くの史料を提供しつつある。本研究は、これら講義・講演史料を著書とは異なる手法で分析し、ブルクハルト史学像を刷新することを目標とした。その際、歴史家の社会的役割を「歴史の教師」(レーヴィット Karl Löwith) と再定義し、歴史学を「教育としての歴史」ととらえなおした。その立場から、ブルクハルト史学とその時代について、つぎの6章にわたって考察した。

第1章「市民の教育者」においては、スイス最古の大学・バーゼル大学—市民の援助によって19世紀に再興した小規模教養型大学—におけるブルクハルトの3つの教育活動(大学講義、大学予科授業、公開講演)を分析し、教養ある市民層という精神的階級の育成、彼らに対する生涯教育が、ブルクハルトのライフワークであったこと、文化史学とは、その教養教育に援用された方法であったことを指摘した。また、大都市ベルリンからここに赴任したディルタイの判断とブルクハルトのそれを対比することによって、バーゼルという文化的空間の歴史的な位置づけを試みた。ブルクハルトにとって、それは「古いヨーロッパの教養」を育んだ市民的・小国家的な気風が息づいている価値ある空間であったとした。その文化的担い手である教養ある市民層と共に生きることを「歴史の教師」ブルクハルトは、ヨーロッパの歴史家として選択したと論じた。

第2章「革命時代の人間—オプティミズムの時代」は、正教授就任初期から継続した講義「革命時代史」を手がかりに、ブルクハルトの時代判断をその教育的脈絡から解き明かした。彼はフ

フランス革命以降の現代を「革命時代」と呼び、ヨーロッパ史上類例のない特異な時代として認識していた。ヨーロッパ的な社会の特質を小国家に認め、古代ギリシアのポリスにその源流を求めるブルクハルトにとって、中央集権的な大国家を建設しようとする現代史の趨勢は、ヨーロッパ世界の大きいなる危機を意味した。すなわちそれは物質的な「幸福」をめざすオプティミスティックな世界観によって、社会を恒常的に変革していくものであったが、ヨーロッパ世界に特徴的な精神的自由の土壌を駆逐していくものとして、彼の眼に映じたのである。そのような洞察を 1840 年代の新聞記者時代に洞察した彼が、1846 年のローマ滞在によって旧社会の価値を深く体験してのち、その成果を教育の場において生かそうとしたと指摘した。

第 3 章「歴史学と近代国家—プロフェッショナルリズムの時代」においては、若き歴史家ベルンハルト・クグラへの書簡を手がかりに、同時代の歴史学界、とくに科学化・職業化プロセスを推進し近代歴史学の社会的構造を形成したドイツ歴史学界に対するブルクハルトの見方を精査し、文化史学の史学史的な位置づけを試みた。その結果、「近代史学の父」ランケの史料批判を継承し、国民国家不在状況の下、ドイツ国民の歴史を叙述した「ランケ学派」=ドイツ正統史学を、ブルクハルトが古代オリエントの知識階層=国家的特権階級と同定していたことを指摘した。彼はそこに特権階級特有の「内的限界性」を看取り、むしろそのような階級を形成しなかった古代ギリシアの学問にあるべき理想を求めた。そのためスイスの歴史協会に積極的に協力し、協会の主要活動領域ローカルヒストリーに、古代ギリシア史学の萌芽をみたのである。ブルクハルトは、ドイツ正統史学が承継しなかったランケのもうひとつの遺産、普遍史理念を積極的に継承し、これをローカルヒストリーから「世界史」への浮上原理とした。そのような伝統の創造的融合のなかに、文化史学が生まれたと論じた。

第 4 章「歴史術としての文化史学—ディレクタントイズム」では、歴史学興隆の世紀 19 世紀に「歴史病」をみたニーチェとの関係から、歴史のディレクタント研究者育成を志したブルクハルトの史学観を明らかにし、ディレクタント史学の方法として構築された文化史学の機能と方法論的特徴を分析した。古代ギリシア史学の「実用主義」に歴史的知の本来的な役割を求めるブルクハルトは、普仏戦争の勃発以来、トゥキュディデス的な「出来事の歴史」ではなく、ヘロドトス的な人間の内面に向かう歴史によって、それを実現することを企図した。典型的な歴史考察法をとる文化史学による教育は、教養層にディレクタント研究を手ほどきするものであり、その研究はプロフェッショナルな歴史学が科学外的世界に放逐した実用主義的=社会的歴史的機能を、歴史学に担保するものであった。それはブルクハルトが考える「歴史病」時代における歴史学のあり方を提示するものであると結論づけた。

第 5 章「ヨーロッパ的なもの—ペシミズムの復権」では、普仏戦争期にブルクハルトの文化史講義群において展開されたヨーロッパ史像を分析し、革命時代に生きるバーゼルの聴講生にとってそれがいかなる意味をもったかを考察した。進歩史観的オプティミスティックな歴史像が広範に浸透する時代に、これを脱構築し、進歩史観によって放逐された歴史的要素を救済する役割をブルクハルトの文化史 4 学期講義サイクルが果たしていたことを指摘した。彼が提示するペシミスティックなヨーロッパ史像は、地上の重圧に忍耐し行動する人間の形姿に、人間精神の力を看取るものである。そこに登場する偉大なる人びとは、個と全体を闘争的に結びつつ多様性を現出する存在であり、まさに精神的自由の風土ヨーロッパを醸成するものであった。そのような偉大な「ヨーロッパ的なもの」を観想することを、新しい世代に勧めた。それは地上的繁栄に向けて平板化していくオプティミズムとしての危機に対して、精神的なものを擁護する対抗手段であったと指摘した。

第6章「精神史としての文化史学」は、文化史学による教養層の教育が、歴史的世界に対してもつ意味について、ブルクハルトの史学思想に則して考究した。「教育としての歴史」がめざしたものは、教養ある市民層が、生涯にわたって歴史的なものの研究を行うことであったが、それは、革命時代において断絶しつつある、過去との精神的連続性を意識的に保持することを意味した。ブルクハルトによれば、人間は物質的個別存在であるだけでなく、精神的共同的存在である。前者に対応するものが自然であり、後者に対応するものが歴史である。自然と対照的な性格をもつ歴史は、人間固有のあり方を構成するものであった。過去を桎梏として退け、「自然に帰れ」とするルソーら啓蒙主義者の主張は、人間を自然状態＝野蛮に戻し、歴史的存在としての人間を死滅させるものであったといえる。それは、人間精神のかつてなき存亡の危機を意味していた。ブルクハルトは、そのような時代に、教養層という階層に、精神の連続性、ヨーロッパの社会を人間社会ならしめる原理の維持を期待したと結論づけた。

以上の考察から、ブルクハルトが教養層への教育によって、歴史がもつ歴史的社会的な作用力（歴史の実用主義）を実現しようとしたことが確認される。彼が洞察した多様性と自由のヨーロッパは、未曾有の社会変動期、革命時代においては社会から消失しつつあり、歴史的考察を通して教養層の内面世界において保つことができるのみである。だが、そのような教養層の営為が、次代の社会形成に関わりうることをブルクハルトは確信していた。それらのことは科学世界への貢献＝研究に特化した近代歴史学に対し、歴史的知のいっそう豊かな力と可能性を示唆するものであったといえるだろう。